

岐阜県感染症発生動向調査（2018年第27週～第30週分、7月分）コメント

平成30年8月22日

月番：馬場 尚志

＜全数把握対象疾患＞

- 一類感染症の報告はない。
- 二類感染症
結核は、前年同期までの累計と比較し、潜在性結核感染症は減少しているものの、発症患者の減少はわずかで、高齢者ではほぼ前年と同様の報告数である。
- 三類感染症
腸管出血性大腸菌感染症が17例報告され、前年同期までの累計と比較し倍増している。この17例の中には家族内感染例が3組みられている。
- 四類感染症
レジオネラ症が13例報告され、前月・前年と比較し増加している。
- 五類感染症
後天性免疫不全症候群は、前年と比べ報告数が多い状況が続いている。梅毒も、コンスタントに報告されており、ほぼ前年並みの報告数で推移している。

＜定点把握対象疾患＞

- RSウイルス感染症は、昨年以上に早い時期から、より多くの報告がみられる。
- 手足口病は、前月より報告は多いものの、前年と比較すると大きく減少している（前年同期比5.2%）。
- ヘルパンギーナは、前月・前年と比較し増加している。
- 流行性角結膜炎も、前月と比べ増加傾向である。

- ・ 結核は、潜在性結核感染症は減少しているものの、発症者数には大きな変化がなく、引き続き県民および医療者への注意喚起・啓発が必要である。
- ・ 腸管出血性大腸菌感染症は、前年と比較し報告数が倍増している。気温が高い時期に多いことから、食品関係者はもちろんのこと、一般の人々を含め県民への注意喚起・情報提供が必要である。
- ・ レジオネラ症も、気温が高い時期に多くみられる。日本全体でみても、今年は例年より報告数が多く、県民および医療者への情報提供が必要である。
- ・ RSウイルス感染症は、昨年以上に早期かつ多くの報告があり、今後の流行状況に注目が必要である。
- ・ 流行性角結膜炎は、県内の定点当たり報告数は前年同期より少ないものの、日本全体の報告数は、ここ数年の中でも高い水準で推移しており、県民および医療者への注意喚起が必要である。